令和元年度　鳥栖市立麓小学校　学校評価結果

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
「ふるさとを誇りに思い、やさしく・かしこく・たくましく生きる麓っ子の育成」	◎子どもの「学び」を鍛える・・学力向上 ・国語科授業による活用力の向上 ◎子どもの「心」を鍛える ・鳥栖西スタイル「三訓」「あいさつ」「時間」「清掃」を大切にした指導を行う。 〇子どもの「体」を鍛える 〇教師力向上・地域連携

達成　A：ほぼ達成できた
B：概ね達成できた
C：やや不十分である
D：不十分である

重点目標を具体的に評価するための具体的な指標を盛り込む

3　目標・評価

①子どもの「学び」を鍛える

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力の向上	・学習規律の定着	・「学習のめあて」を教室前面に掲示し、児童の、授業や家庭学習への取り組みの意識付けをする。 ・「時計を見て行動し、授業が始まる前には着席している」「授業前には学習の準備をしておく」「はいの返事」などを9割程度にし、習慣化する。 ・教室全面の掲示物を少なくし、「教室環境のUD化」に取り組む。	・「学習のめあて」を全クラスに掲示し、話の聞き方や返事などについて指導するとともに、自学がんばり週間で家庭学習の定着を図る。 ・教室前面の掲示物を全校統一し、少なくすることで「教室環境のUD化」を図り、落ち着いて学習に取り組めるようにする。 ・「めあて」「見通し」「まとめ」などのカードを使って1時間の学習の流れが分かるようにする。	A	・学習のめあてや教室前面の掲示物を全校で統一し、落ち着いて学習に取り組める環境を整えた。 ・チャイムがなくても時計を見て行動する、次の授業の準備をして休み時間をとる、返事をきちんとするなどの学習規律をことを継続して指導してきたことで、定着してきた。 ・「めあて」「見通し」「考え」「まとめ」などのカードを使い、1時間の授業の振り返りがノートでできるようにしてきた。	・返事をきちんとするについては、9割以上の児童ができている。クラスでの呼びかけを通して、児童の返事への意識がさらに高くなると思われる。 ・次の授業の準備をして休み時間をする、時計を見て行動することについては、意識して行動する児童が増えてきた。習慣化を目指して、繰り返し指導していく必要がある。
		・基礎・基本の定着	・県より配布の家庭学習の手引きを活用し、家庭学習の定着を図る。 ・学力向上を意識した学習を仕組む。 ・読書量１人平均年間８０冊(4年生以上は50冊)以上を目指す。	・家庭学習の手引きを全家庭に配布し、学級懇談会や学年通信・学級通信等で保護者に協力を呼びかける。 ・本時のめあて、まとめを意識した授業を行う。言葉や式を使って自分の考えを表現させる。 ・「ふもとっ子家庭学習がんばり週間」を年3回設定し、家庭学習の習慣化を図る。時期を中学校の定期考査と合わせ、家庭の協力を求める。	A	・家庭学習の手引きを周知し、「ふもとっ子家庭学習がんばり週間」で取り組みを点数化した。目標点数に達した児童を調査したところ、約70％の児童が達成することができている。ただ、児童によって温度差があるため、全体で取り組みを強化できるように呼びかけを続けていく必要がある。 ・「自学ノートがんばり週間」で優秀な児童を称賛し、子ども達のがんばりにつながった。 ・校内研で授業改善を呼びかけ、国語の授業に限らず他の教科においても、めあて・まとめを意識した授業や振り返りに自分の考えを表現できるようになってきた。 ・読書量一人平均80冊以上を達成した。	・既習内容の確実な定着を目指し、基礎基本を繰り返し指導していく。 ・次年度も引き続いて「ふもとっ子家庭学習がんばり週間」を設定し、目標点数に達した児童が80％を超えるように保護者に協力を呼びかける。
		・活用力の向上	学習状況調査における活用力の問題のポイントを昨年度より7ポイント向上させる。	・国語科の公開授業を行い、研修を深め、活用力の向上をはかる。 ・活用力向上を意識した学習課題に適宜取り組ませたり、授業の終わりに学習用語を使った振り返りを行ったりする。	B	・全校研3クラス、グループ研１５クラスの国語科公開授業を開催した。 ・学習状況調査における活用力の問題の正答率が昨年度より向上したのは、「５年国語（＋10.5）」「６年理科（＋20.4）」であったが、教科によっては下回っているものも見られた。	・活用力向上を意識した学習課題に取り組ませる。大事な言葉を見つけながら読み、条件に合わせて書く力が付くように日頃から意識して指導する。
	〇日本語教育	・教科「日本語」の推進	・日本の言語や文化に親しませ、児童の学習意欲を高める。 ・授業参観や学年・学級通信等を通して，教科「日本語」の実践を保護者や地域に広める。	・教科「日本語」の確実な実施を通し学習効果を高める指導の在り方を考えながら実践にあたる。 ・各学年の授業で使用した実践資料を保存し，活用を促す。 ・年に1回は必ず授業参観で教科「日本語」の授業を実践し、保護者・地域への広報に努める。 ・地域人材や地域教材の活用を通して，地域に根ざした教科「日本語」の実践を行う。	A	・授業参観時には、全学級で教科「日本語」を公開し、保護者や地域への啓蒙を図った。 ・５年生の詩吟の授業や麓ふれあい祭りなど、全学年で多くの地域人材を活用し、日本の言語や文化に大いに親しませることができた。 ・各学年の授業で使用した実践資料等の保存が十分とはいえなかった。	・授業の実践資料を活用できるよう保存を呼びかけ、実践しやすい環境作りに努めていく。

②子どもの「心」を鍛える

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	・あいさつ、返事、はき物そろえ、廊下右側歩行の徹底 ・無言掃除の徹底	・「児童生徒は、あいさつ、返事、無言掃除がきちんとできている」と回答する保護者を70％以上、教職員・児童生徒を80％以上にする。 ・昇降口の履き物は１００％、トイレのスリッパについては90％以上そろっている状態を目指す。 ・廊下の右側を静かに歩くことができる。	・「あいさつ、返事、無言掃除」についての指導を、年度初めに全校集会、学級指導を通し徹底する。また、年間通して全校集会等の際に「あいさつ、返事、無言掃除」についてふれ、意識の継続を促す。 ・履き物が並んでいるかを全校放送で知らせて、児童・職員の意識を高める。 ・廊下の右側を静かに歩くことができるように強く呼びかける。	B	・アンケートの結果、昨年同様、あいさつ、返事、無言掃除、はきものそろえのいずれの項目も高い数値で目標達成ができている。この中で、あいさつができていると答えた保護者の割合が、４％増えたことを喜びたい。廊下歩行については、まだまだよい状態とは言えない。返事についても今後の課題として残っている。	・廊下歩行や返事については、教師の側からの呼びかけがたりていない。教師間の共通理解を深めたい。また、よい行動をしている児童をもっとほめていくようにしたい。
		・道徳の時間、人権・同和教育の充実	・全学年児童対象に、人権集会を行い、人権週間までに全学年人権標語に取り組み、実践を行う。 ・年間に1回以上、全ての学級で保護者や地域の方が参観することが可能な「ふれあい道徳」の授業を行う。 ・年間指導計画を見直し、より児童の実態に応じた指導計画作成を目指し指導に生かす。	・人権週間に人権学習、人権集会を実施し、全校児童の人権意識の向上を図る。 ・年度初めに、全職員がふれあい道徳について共通理解し、鳥栖市教育の日を中心とした計画的な実施を行う。 ・各学年ごとに年間指導計画を見直し、学年の実態に応じた年間指導計画作成を行う研修会を計画する。	A	・人権週間には、人権についての話を全校児童にすることで、意識を高めることができた。また、人権標語に取り組むことで、友だちに優しく思いやりの気持ちをもって接することの大切さを考えさせた。 ・教職員が意識して、人権・同和実践集を活用し実践することができた。 ・保護者や地域の方々が参観できる道徳の授業を全学級で実施することができた。授業を通して学校で指導したことを理解してもらうことができた。	・人権・同和教育資料を適切に活用して、指導を継続し、実践しやすい環境作りに努めていく。
		・人や自然とふれあう体験活動	・麓地区の自然と人のよさについて学び、ふるさとのよさを意識する児童生徒の割合を90％以上にする。	・「総合的な学習の時間」等を活用し、学校と地域連携コーディネーターとの連携を図り、自然体験実施計画に沿って、農業体験を行う。 ・麓ふれあい祭りで、地域の方々と共に昔遊びなどの体験活動を行う。	A	・人や自然とのふれあいを深める活動（栽培活動・田植え稲刈り・焼き物作り・麓ふれあい祭り）などを地域の方に協力してもらい、体験でき、ふるさとのよさを意識させることができた。 ・体験活動や地域の方々とのふれあいながら学習したことを楽しむことができた児童は約98％であった。	・今後も地域の方と密に協力・連携し、学校全体で共通理解して進めていく。
	●いじめの問題への対応	・早期発見、早期対応体制の充実 ・いじめといのちを考える日の取り組みの充実	・いじめ等の問題行動の早期発見、初期対応に努める。 ・毎月10日に、心のアンケートを実施して、児童が安心して学校生活を送れるようにする。	・いじめ防止対策委員会を年2回開催する。 ・毎月１０日「いじめと命を考える日」に児童対象のアンケートを実施し、児童の状況や気持ちを把握し、すぐに対応する。 ・得た情報にすぐに対応し、全クラスがアンケート用紙を職員室に保管して、児童の変容をつかむ。	A	・今年度は、保護者や他の児童からの訴えにより、一人の児童が周りから避けられるなどのいじめ事案が発覚した。いじめが多くなったというネガティブな考え方ではなく、学校全体が相談しやすい雰囲気になったととらえたい。発覚した事案には、全体で共有し丁寧に事後指導を行うことができた。	・今後もアンケートや相談体制の充実で早期発見に努めていきたい。 ・いじめ問題を未然に防止するために、グループエンカウンターなどを取り入れた居心地のよい学級づくりに取り組んでいく。

③子どもの「体」を鍛える。

領域	評価項目	評価の観点（具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題（左記の理由）	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体つくり	・よりよい生活習慣の定着	・給食後の歯みがき実施率を100％にする。 ・目標就寝時刻を守る児童を70％以上にする。 ・毎月1日のノーテレビノーゲームデー取組率を80％以上にする。	・「ふもとっこがんばり表」を活用し,継続的な指導を行う。 ・学校からの各種便りやまちコミ等で啓発を行う。 ・親子で楽しく過ごせるアイデアを紹介する。	B	・給食後の歯磨きについては、担任の指導やチェック表の活用などによって概ねできていた。 ・就寝時刻については、目標を概ね達成できた。 ・ノーテレビ・ノーゲームデーの実施率については、目標を概ね達成できた。	・引き続きがんばり表を活用し、継続的な指導を行う。 ・保健や学活の授業を計画的に行い、歯磨きや睡眠の重要性を引き続き指導する。 ・引き続き、前日の担任の話や活動の意義を話すことで、ノーテレビ・ノーゲームデーの周知徹底を図る。
		・体力の向上	・天気が良い日は９５％以上の子どもが１日１回は休み時間、外で遊ぶようにする。	・学級で全員一緒に遊ぶ日を設定したり（週1回程度),昼休みや業間休みには,外遊びの声かけをしたりする。 ・学校からの各種便りや,新体力テストの結果を知らせることで,保護者・地域への啓発を行う。（学校だより、給食・食育だより、保健だより、学級通信など）	A	・各学級の係活動を中心として、外遊びの日を設定することができた。多くの児童が外遊びを楽しんでいた。 ・各種便りによる啓発活動は、徐々に効果を現しつつある。 ・新体力テストの結果より、走力が低下していることがわかった。	・係活動を奨励したり、担任が一緒に遊んだりする日を増やす。また、新体力テストの結果の分析したことを子ども達に話したりすることで、外遊びが重要であることを教える。 ・引き続き各種便りによる啓発活動を行う。 ・体育の授業の中で少しでも走る時間をとるように共通理解を図った。

④教師力を磨く

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
学校運営	○危機管理体制	・危機管理意識の高揚	・危機管理マニュアルを全職員に周知し、危機的事象発生時の役割を職員の100％が理解し児童生徒の安全確保を確実に行う。 ・校内外の危険個所を知らせ、児童生徒の安全に関する意識を高める。″	・危機管理マニュアルの内容を全職員で確認し、児童の安全を確保できるようにする。さらに、危機管理マニュアルの簡易版も作成し、裏表紙に示し、危機管理に対しての対応を徹底する。 ・危機を想定した避難対応訓練を計画的に実施する。（火災、不審者、地震） ・施設設備の定期的な安全点検を行い、危険を伴う場合は迅速に対応する。	A	・リスクの軽減を主幹教諭と指導教諭と連携しながら校内の環境整備を行うことができた。昨年同様、危機管理マニュアルの簡易版を作成し、事案が起こった場合に被害を最小限度にできる対応を周知できた。 ・避難対応訓練を計画どおりに実施することができた。 ・月１回の安全点検を漏れなく行い、危険個所に迅速に対応（修理、交換等）することができた。	・予防策だけではなく、事件事故が起こった場合の対応の手立てを定期的な研修で、全職員で共通理解しておかなければならない。
	○特別支援教育の充実	・個に応じた支援体制の確立	・特別支援学級在籍児童・通級指導教室利用児童・診断を有する児童について、個別の指導計画の作成を100％にする。 ・特別支援教育に関する職員の意識・スキルの向上を図る。	・該当児童について、個別の指導計画を作成し、それに沿って指導・評価・次の目標設定をする。 ・学校生活支援事業(巡回相談)を活用し、指導の支援・指導にいかす。 ・特別支援教育の視点での教育活動ができるように職員研修を行う。	A	・該当児童の個別の指導計画をほぼ100％作成することができた。 ・診断を有している通常学級在籍児童に対する支援体制を考える必要があると感じる。 ・担任、保護者の要請により学校生活支援事業(巡回相談)を活用した.(年間4回) ・支援学級の授業公開を行い、全職員が参観した。その後の研修会では、全職員から質問、感想が出た。有意義な時間であった。	・通常学級在籍の要支援児の対応の仕方について管理職を含めた関係職員を中心とした校内支援体制を整える。また、外部機関とも連携を図る。
	○教職員の資質向上	・授業技術向上 ・授業づくりのステップ1・2・3の活用 ・UDの視点での環境整備を行う。	・お互いの資質向上のため、1年間に1回以上公開授業を行う職員を１００％にする。 ・全学級においてUD教育の視点での教室環境を整える。	・研究授業を学期に1回以上実施し、授業研究会を行うことで授業力アップにつなげる。 ・UD教育の研修会を開催し、授業内容や教室環境を整える。 ・全職員で共通して取り組むものを明確にし、その徹底を図る。	A	・麓小で取り組む活用力についての共通理解を図ることで、校内研究のテーマにそった研究授業に全職員で取り組むことができた。また、全ての授業で研究会を行ったことで、各学年から提案された手立て等を、他学年の職員が自らの学年でも生かす場面が見られ、授業力アップにつながった。 ・校内研究の中で、モデル文の提示、視覚教材の効果的な使用等、UDの視点に立った手立ての工夫を行うことができた。そのことを指導案にも銘記することで、全職員で共通理解を図ることができた。	・新学習指導要領の教育目標を視野に入れ、これまで培ってきた手立ての工夫等をさらに深めながら、教師の指導力改善や児童の学力向上につなげていきたい。 ・UDの視点を取り入れた授業に積極的に取り組む。さらに、その具体的な視点の追究を研究の内容に盛り込む。

本年度の重点目標に含まれない共通評価項目

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 （左記の理由）	具体的な改善策・向上策
学校運営	○地域との連携	・地域連携活動の推進	・地域と連携した活動「麓ふれあい祭り」の満足度の割合を90%以上にする。	・地域との連携を深め、「麓ふれあい祭り」の内容を検討し、より充実感を味わえる企画とする。	A	・学校評価アンケートにおいて、体験活動を重視し、人や自然とのふれあいを深める活動（麓ふれあい祭り等）をしていることは、麓小学校のよいところだと思っている児童が97.5％、保護者が99.2％と、高評価であった。ただし教師については、89.3%と、10ポイントほど差がある。教師の負担感を軽減し、教育目標を効果的に達成できるような見直しが必要である。	・児童、保護者共昨年度よりさらに高い評価をいただき、大変喜ばしいことである。来年度は、新学習指導要領の教育目標に沿って、また、教師の働き方改革の推進も考慮しながら、活動や準備についての改善に取り組んでいく。地域、保護者、学校の願いを叶えるべく、開かれた学校推進委員会を核として、話し合いを重ねていきたい。
	○小中一貫教育の推進	・鳥栖西スタイル「三訓」「あいさつ」「時間」「清掃」を大切にした指導の充実 ・小中学校職員の相互理解	・研究企画委員会を月一回程度開始し、取り組みを具体化していく。 ・3校合同研究会を年1回以上行う。	・4月当初に年間計画を立て、企画委員会等を行う。また、そこで決定した内容を通信で三校の全職員に紹介し、取り組みを充実させる。 ・8月に三校合同研修会を実施する。 ・11月の授業交流会の準備を万全に行う。	A	・UD教育ダイジェスト版を今年度も作成して取り組んだ。教職員の意識も高まり、授業や生活の中で推進できた。 ・台風で夏期休業中の三校合同研修会が中止になったが、西中の校内研修に多くの職員が参加した。 ・麓っ子家庭学習がんばり週間の取り組みを通して学習規律や生活規律の定着につながった。 ・中学校の体験授業や部活動体験、あいさつ運動に充実して取り組むことができた。 ・1月に行った三校合同授業研究会では、有意義な情報交換ができ、今後の指導に参考となる意見がたくさん見られた。	・学級での取り組み等形骸化しそうなことがある。児童に取り組みの意味を理解させながら実践へとつなげる必要がある。 ・年間計画や研究体制を見直しながら、より一層充実させるような具体的な提案を心がける。 ・三校の教職員が共通認識を図れるような通信を発行し、今後も啓発に取り組む。
	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	・負担感、多忙感の解消 ・校務処理の効率化 ・時間外業務の削減	・時間外業務を月に45時間以内を目指す。 ・報告、連絡、相談を密にし、課題に対してチームで取り組み、負担感を軽減する。 ・見通しをもって業務に取り組む環境を整備する。	・業務終了時刻を明確に示し、また、定時退勤日に合わせた働き方を周知する。 ・児童や保護者との話し合いは複数対応を原則とし、協議しながら、統一した方針で対応する。 ・指導教諭と連携し、提出文書などの締め切りや会議の日時などを常に示しておき、業務の見通しを持てるようにする。	B	・2月現在、半数以上の職員の時間外業務は45時間である。 ・年間通して定時退勤日は85％程度守ることができた。 ・行事や提出文書締切等の日時は、月行事、週行事、連絡会配布プリント及び行事黒板などで、見通しをもって業務に取り組むことができるようにした。 ・業務データを整理し、ルートディレクトリーには、鳥栖市内で共通したディレクトリー構成に変更し、異動しても分かりやすいように改変した。	・定時退勤日の業務終了時刻を守ることができないときや休日に業務をする職員もいた。行事等の精選は、これまでも取り組んできたが、これからは担任が創意工夫しながら学級事務を厳選し、全職員が共通理解をして業務を行い、在校時間を削減するような手立てが必要がある。

4　本年度のまとめ　・　次年度の取組

○学力の向上については、学習規律（チャイムがなくても時計を見て行動する、次の授業の準備をして休み時間をとる、返事をきちんとするなど）を継続して指導、学習習慣の定着を目指してきた。読書量も目標を越え、一人平均90冊を達成できた。また、活用力は一部の教科で向上がみられた。次年度も活用力を意識した学習課題に取り組んでいく。
○いじめ・いのちを考える日の取り組みだけでなく、児童の生活の様子を教師全員で細かく見ていくようにしたり、児童アンケートを実施して実態把握に努めたり、定期的な保護者へのアンケートも実施したりして、学校・児童・保護者が一体となって「いじめを許さない」機運を高めてきた。今年度も、保護者や児童からの訴えにより、いじめ事案が発覚した。学校全体が相談しやすい雰囲気になったと捉え、これからも発覚した事案には、全職員で情報を共有し丁寧に指導を行うよう努めていく。また、人権集会や全校集会での取り組みを充実させあたたかい心情を育て、いじめ0を目指して指導を継続していく。
○地域連携活動である体験活動の推進に関して、ほとんどの児童・保護者が「麓小のよいところ」であるとアンケートで答えている。本校の特色でもあるので、「開かれた学校推進委員会」と連携し、さらにこれらの取組を継続し、地域との連携を深めたい。
○時間外の校内勤務時間を月に45時間をめざして取り組んできた。年間平均すると半数程度の教員が守れている。次年度は、定時退勤日を100％守ることを目標にする。

●は共通評価項目のうち必須項目、○は独自評価項目